

令和元年9月3日現在

機関番号：20101

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H05096

研究課題名(和文) 精神科医療機関における精神疾患をもつ親への円環式子育て支援モデル構築に関する研究

研究課題名(英文) Construction Circular Circulation Support Model for between Parents with Mental Illness and psychiatric medical service

研究代表者

澤田 いずみ (Sawada, Izumi)

札幌医科大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：50285011

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,070,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、精神科医療機関を利用する親へ支援プログラムを提供し、支援を受けた親がその体験を医療機関・地域へフィードバックするという円環構造を作ることが、精神疾患をもつ親のリカバリーと支援の充実に貢献しうるかを明らかにすることである。支援プログラムは子育て態度を改善し、フィードバック活動は当事者の他者支援活動の増加と地域支援者の強み志向支援の認識の向上につながり円環構造の有効性が示された。親自身の非擁護的養育体験や認知機能の特性といった支援ニーズが明らかとなり、継続的に自己を語る場と作業療法的アプローチの必要性が示された。また支援評価指標としてのオキシトシンの有用性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

精神科医療機関を利用する親へ支援プログラムを提供し、支援を受けた親がその体験を支援者へフィードバックするという円環構造を作ることが、精神疾患をもつ親のリカバリーと支援の充実に貢献しうるかを明らかにすることを目的とした。

支援プログラムは親の子育て態度を改善し、フィードバック活動は親の他者支援活動の増加と地域支援者の強み志向支援の認識の増加につながる事が確認でき、円環式子育て支援モデルという強み志向の支援モデルを創案することができた。また、親の非擁護的養育体験や認知機能の特性などの支援ニーズと支援評価の指標としてオキシトシンの有用性を明らかにでき、今後の支援開発に有益な知見を得ることができた。

研究成果の概要(英文)：We conducted the following activities: (1)providing parent support programs in mental clinics; (2)establishing a location for study participants to tell their opinions to community supporters; (3)survey on cognitive functioning and parenting attitudes; (4)a survey on the usefulness of oxytocin as an evaluation index for parenting support.

Through the support program, participants showed improvements parenting attitudes. Through the participation in feedback activities, participants showed increases in behaviors of supporting others, and community supporters developed a raised awareness of the importance of support to focus on the strengths. However, parents had parenting experience with low care, and the characteristics of the cognitive functioning related to inadequate parenting attitudes. It is necessity to develop programs for dialogue about their parenting experiences and for cognitive function training. In addition, oxytocin seemed to be effective for evaluation indicators.

研究分野：精神看護学

キーワード：精神科医療機関 子育て リカバリー 親支援プログラム トリプルP 円環モデル 認知機能 オキシトシン

様式 C - 19, F - 19 - 1, Z - 19, CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

精神保健福祉分野におけるリカバリー志向の高まりを背景に精神障害をもつ人が親となる機会が増えている。さらに、子育て困難を背景に精神的不調を抱える親が増加するなど、精神科医療機関には長期にわたる子育て支援への関与が求められている。しかし、日本においては障害者が親になるという前提基盤は十分とはいえず、精神障害をもつ親とその子どもを支えるネットワーク支援の整備は急務な課題となっている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、精神科医療機関を利用する親へ支援プログラムを提供し、その支援を受けた親がその体験を医療機関・地域へフィードバックするという円環構造を作ることが、精神疾患をもつ親の子育てを通じたリカバリー、並びに支援の充実に貢献しうるかを明らかにすることである。

目的1：精神科医療機関を利用する親を対象にエンパワメント、並びに育児技術向上に関わるプログラムを通所または訪問により提供し、その効果を量的・質的に明らかにする。

目的2：上記の支援を受けた親が医療機関や地域住民に対して自らの子育ての体験を発信する活動を行い、この活動が親のリカバリー、並びに支援の質の向上に貢献するか明らかにする。

目的3：認知機能と子育て態度の関連を明らかにし、精神障害をもつ親への作業療法的アプローチ考案の基礎データとする。

目的4：子育て支援の評価指標としてのオキシトシンの有用性を明らかにする

3. 研究の方法

(1) 精神科医療機関における親支援プログラムの評価

対象は、精神科医療機関に通院中の親で18歳未満の子どもを1人以上有している者とした。外来において親自身を語るペアレンティング・ジャーニー(以下、PJ)と子育て技術を学習するPositive Parenting Program(以下、TP)のいずれかあるいは双方の親支援プログラムへの参加と、その前後での自記式質問紙調査、並びに、フィードバック活動としての面接調査への協力について書面で同意を求めた。自記式質問紙の項目は、人口統計学的データに加えて、診断名、Rosendberg 自尊感情尺度、親の被養育体験としてPBI(Parental Bonding Instrument)を尋ね、プログラムの効果指標として子育て態度に関わるParenting Scale(PS)、子どもの問題行動への認識Strength and Difficulties Questionnaire(SDQ)および子育ての体験Parenting Experience Survey(PES)、リカバリーの指標としてDepression Anxiety Stress Scales(DASS)、日本語版Recovery Assessment Scale(RAS)について支援プログラム前後で回答を求め、Wilcoxon 順位和検定を行った。

(2) 当事者によるフィードバック活動とリカバリー

面接調査によるプログラムへのフィードバック活動

精神科医療機関を利用しグループTPに参加した母親9名から面接調査への協力を得た。1対1の半構造化面接を行い、参加した動機、参加中に感じたこと、参加後に変化したと思うことについてたずね、内容分析を行った。

研究参加者の地域でのフィードバック活動

今回の研究参加者の内、数名が当事者としての経験を地域に発信するという活動を実施した。これらの当事者は研究者と共に地域の医療・福祉機関に出向き、自分たちの生きづらさ、または今回のプログラム等に参加した経験をフィードバックするという本研究の円環構造形成のプロセスの要を担った。2名の研究参加者は地域の医療機関に赴き、「当事者研究」を用いて自分たちの弱さを公開した。

(3) 認知機能と子育て態度の関連

対象は、精神科医療機関に通院中の7名の女性で、平均年齢は 39.4 ± 5.4 歳であった。診断名は統合失調症圏が2名、気分障害圏が2名、不安障害圏が3名であった。選定基準として、「妊娠中、または18歳未満の子どもを1人以上有している」を設定した。また、研究方法として、自記式質問紙、および認知機能検査による評価を施行するため、質問内容の理解が困難と考えられるような著しい精神症状を有する、あるいは知的障害を有する者は除外した。研究参加に同意が得られた者に対して、自記式質問紙への記入を求め、その後認知機能検査を施行した。自記式質問紙は、PS、PESの「困難感」、「自信」、「サポートへの認識」を使用した。認知機能検査は、統合失調症認知機能簡易評価尺度日本語版(BACS-J)、Trail-Making Test(TMT)、およびJapanese Adult Reading Test(JART)を施行した。統計解析として、子育て態度の指標であるPSの「多弁さ」、「過剰反応」、「手ぬるさ」下位尺度得点、およびPSの各項目得点と、BACSの「言語性記憶と学習」、「ワーキングメモリ」、「運動機能」、「言語流暢性」、「注意と情報処理速度」、「遂行機能」得点、TMTのTMT-A得点・TMT-B得点、およびJART得点との相関をSpearmanの相関係数にて検証した($r = 0.05$)。

(4) 子育て支援の評価指標としてのオキシトシンの有用性

対象はA市で実施されたグループトリプルP(全7セッション、うち2回は電話セッション)

ン)に参加した親9名で、平均年齢は 37.2 ± 3.2 歳であった。子育て支援プログラムの有用性について、生物学的にも評価する目的で、生体サンプル(唾液)における、愛情・養育行動関連ホルモン(オキシトシン)の濃度変化について解析を行った。子育て支援プログラム1,2,3,4,7の計5グループセッションの開始前に、参加者から唾液を採取し凍結保存した。唾液サンプルから Enzo Life Sciences (NY, USA)社製の ELISA キットを用いて酵素標識免疫学的測定法によりオキシトシン濃度を測定した。

4. 研究成果

(1) 精神科医療機関における親支援プログラムの評価

2つのプログラムはそれぞれ約2か月で実施された。プログラムに参加し質問紙による回答を得られた8名の母親が分析対象となった。平均年齢は 33.9 ± 5.5 歳であり、診断名は気分障害圏が3名、発達障害2名、不安障害圏が3名であった。4名が子どもに発達障害などの医療ニーズを抱えていた、PBIは6名から有効回答が得られ、Care 因子得点の平均は 11.1 ± 9.6 、Overprotection 因子では 14.2 ± 13.5 と低値を示し、養育様式は養護なき統制が3名、怠惰な養育が2名で、楽観的な養育は1名であった。対象者はPJのみ参加2名、PJとTP双方に参加は6名であった。介入前後の比較において、PSの「多弁さ」($p=-0.046$, $p<0.05$)、「手ぬるさ」($p=-0.043$, $p<0.05$)で改善を認め、DASSでは「ストレス」($p=-0.090$, $p<0.10$)が軽減し、RAS ($p=-0.018$, $p<0.05$)の上昇を認めた。SDQとPESには個人差が見られ有意な変化は認められず、子どもの自身の特性が影響していると考えられた。自由記載では、子どもとの関係性の改善や集うことの大切さの実感に関する記載の他、教材の改善の要望、不調時のパワー不足、集中することの困難さなどがTPに複数回参加した親から課題として挙げられた。

今回の調査は統合失調症圏の親を含んでおらず、また、少人数であるため一般化はできないが、PJ、TPは親の子育て態度を改善し、さらに、リカバリーを促進することが示された。しかし、学習系のプログラムであるTPへの反復参加は動機づけの低下と自己の不全感を強める側面があることが示され、フォローアッププログラム開発の必要性が示された。また、PBIの結果から、ネガティブな被養育体験をもつ親が多く、PJのような自身の経験を語り、気づきを得る場が継続的に保証されることが望ましいと考えられた。

(2) 当事者によるフィードバック活動とリカバリー

面接調査によるプログラムへのフィードバック活動

対象の平均年齢は 37.7 ± 4.6 歳であり、診断名はうつ病4名、適応障害3名、不安神経症2名であった。育児について【自分と子どもの成長への願いと支援への期待】と精神症状に加えて被虐待経験や夫婦不和、孤立など【幼少期から累積する自分を大切にしている体験の不足】、いら立ちなどの【解決不能な心の危機感】という支援ニーズを語り、TPにおいて【学習という枠組みに守られ発展するグループの自助作用】を得て、【自分と人を大切にできる体験の獲得】をした一方で、成育歴に基づく【思い起こされる満たされなかった子ども時代の記憶】が想起され、精神状態や育児信念などにより【期待以上の効果を得ながらも安定しない子育て技術の実施】を語った。

TPの学習的枠組みはメンバー間の相互作用を生み、子育て技術の獲得は親子を含む対人関係の改善につながっていた。しかし、子育て技術の実施は不安定であり、背景には、精神状態の不安定さと先の述べた親自身のネガティブな被養育体験への葛藤や子どもの発達障害といった支援ニーズが認められた。先にも述べたように、親自身の育ちの経験と子どもの育ちを継続的に語ることでできる場の保証と、訪問や子ども支援の関連機関との連携を通じて親子双方を支援することの必要性が確認された。

研究参加者の地域でのフィードバック活動

彼女らがユーモアを交えて語る精神障害を抱えて子育てをする生きづらさのストーリーに安心をしたのか、これまであまり語らずにいた他機関の患者たちも自らの思いを言語化しはじめた。出向いた先の医療機関からは「今後も定期的に訪問をお願いしたい」という依頼を受けた。更に今回の研究参加者の一人は2019年4月、地区センターを拠点に「子育て世代のための当事者研究クラブ」を立ち上げた。精神障害者のみならず、地域で暮らす子育てに苦勞している親が参加した。

これらの地域でのフィードバック活動はリカバリーが生じるために重要な契機となる「ピアサポート」実践である。自分たちのこれまでの苦勞が役に立つと実感できた時、人間はエンパワーされることを覚える。地域でのフィードバック活動は実際に始めるまでに様々な企画・運営の苦勞もあるが、周りの協力を得ながらこれらを乗り越え、「意味ある人間関係」を体験できる。これまでは一方向的にプログラムを受けるだけの当事者だったが、経験をフィードバックすることはリカバリー体験を豊かにし、また、その場に立ち会った地域支援者の強み志向の支援への認識を高めることとなり、地域の支援の質の向上にもつながると考えられた。

(3) 認知機能と子育て態度の関連

PSの「多弁さ」得点はBACS-Jの「ワーキングメモリ」($r=0.88$, $p<0.01$)、「運動機能」

($r = -0.76, p < 0.05$), 「言語流暢性」($r = 1.00, p < 0.01$), 「注意と情報処理速度」($r = -0.78, p < 0.05$), および TMT-B ($r = -0.81, p < 0.05$) の成績との間に有意な相関が見られた。また, PS の「手ぬるさ」得点は BACS「ワーキングメモリ」($r = -0.76, p < 0.05$), および TMT-B ($r = -0.76, p < 0.05$) の成績との間に有意な相関が見られた。さらに, PES の「自信」の得点は JART 得点との間に有意な相関が見られた ($r = 0.81, p < 0.05$)。なお, PS の「過剰反応」, および PES の「困難感」「被サポート感」の得点と認知機能検査の成績との間に有意な相関は見られなかった。

以上の結果から, 精神障害を持ちながら子育てをする中で認知機能が全般的に高いほど多弁さが増す, ワーキングメモリや転換性注意の低さが手ぬるさにつながる, 病前の予測 IQ が高いほど子育てへの自信が高いという可能性が示唆された。今回の検討は対象が少ないことに加えて横断的研究であることから因果関係への言及はできないが, 少人数の検討でも有意な相関が見られたことから今後も子育て態度と認知機能との関連について調査を進める価値があると考えられる。今回の結果をもとにさらに調査を進めることで, 精神障害をもつ親の子育てを支援する上で, どのような認知機能障害を標的とした作業療法的アプローチが有効であるかを検討していきたい。

(4) 子育て支援の評価指標としてのオキシトシンの有用性

プログラム参加者の唾液中オキシトシンは, 第 1 セッションの開始前(介入前)に比べ, 第 2 セッションの開始前までは低下し(平均(-)27%), その後, 第 3, 4, 7 セッションにかけて増加していた(第 1 セッション開始前 vs 第 7 セッション開始前: 平均+17%), (第 2 セッション開始前 vs 第 7 セッション開始前: 平均(+44% ($p = 0.062$))). また, 参加者の子育て態度評価(PS)との関連性解析において, 「多弁」「過剰反応」「総合点」が, 介入前から第 7 セッション実施前までのオキシトシンの増加率(第 7 開始前/第 1 開始前)と, それぞれ有意な負の相関を示した。さらに, オキシトシンの増加率(第 7 開始前/第 1 開始前)は, 子育ての体験指標(PES)における「落ち込みやすさ」と有意な正の相関を示した。

本検討の結果, 子育て支援プログラム参加者の唾液中オキシトシン濃度は, 介入前に比べ, 最終セッションでは 9 名中 8 名で増加しており, プログラムへの参加に, 体内でのオキシトシン産生増加が伴っていることが示された。また, プログラムの第 1 セッションは, 参加者に自身の子育て行動の問題点を把握させる内省的な内容となっており, このことと, 第 2 セッション開始前でのオキシトシンの低下との関連性が推察された。オキシトシンは, 視床下部室傍核で生産され, 下垂体後葉に貯蔵される脳下垂体ペプチドである。近年の研究で, 脳内のオキシトシン増加は, 扁桃体の活性化を介して, 共感性・愛着・信頼に基づく社会認知や社会行動の増強効果に結びついていることが報告されている¹⁾。また, 唾液中オキシトシン濃度は, 血中オキシトシン濃度と相関し²⁾, 唾液中オキシトシン濃度が, 社会的行動変化の生物学的マーカーとなり得ることが示されている³⁾。今後, オキシトシンの濃度変化が, 認知機能のどのようなドメイン変化と相関するのかを明らかとするなどして, 本プログラムの実施が, 参加者の「子育て態度の改善」と, 「他者支援意識の向上」につながっている可能性について, 生物学的に補完評価するアプローチとして進めていければと考えている。

参考文献;

- 1) Labuschagne I, Phan KL, Wood A et al.. Oxytocin attenuates amygdala reactivity to fear in generalized social anxiety disorder. *Neuropsychopharmacology*. 2010; 35:2403-2413.
- 2) Grewen KM1, Davenport RE, Light KC. An investigation of plasma and salivary oxytocin responses in breast- and formula-feeding mothers of infants. *Psychophysiology*. 2010; 47:625-32.
- 3) Carter CS, Pournajafi-Nazarloo H, Kramer KM et al.. Oxytocin: behavioral associations and potential as a salivary biomarker. *Ann N Y Acad Sci*. 2007; 1098:312-22.

(5) 今後の研究課題

精神科医療機関において親支援プログラムの参加機会を得られることは親子関係を改善し, 当事者がその苦労を他者の支援に生かす機会を得ることはリカバリーを促進すると考えられた。今後は, 子育て困難の背景にある親の非擁護的な被養育体験や認知機能の特性, さらには子どもの発達の問題といった多様な支援ニーズを対応できるよう, 子どもや家族も含めた新たな支援プログラムの開発が必要である。また, 今回の調査は, メンタルクリニックに通院可能で認知機能検査や自記式質問紙調査に回答できる健康度の高い対象に限られたことから, 今後は, 訪問や入院の対象となる親を対象とした研究が必要であり, 支援手法の検証とともに, オキシトシンといった簡便な評価指標や観察的指標を導入していく必要があると考えられた。

告示

本研究は札幌医科大学の倫理委員会の承認(承認番号 28-2-36)を得て行った。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

澤田いずみ：精神障害をもつ人の子育て支援のこれから：心の健康 142：36-43，2019。
鵜飼渉，辻野華子，杉村政樹，木川昌康，田山真矢，石井貴男，古瀬研吾，廣瀬奨真，橋本恵理，澤田いずみ，ら：深い学びの要 ディープコミュニケーションとは何か どことどこで会話をしているのか。医療人育成センター紀要 6:35-43，2018。
澤田いずみ，鵜飼渉，池田望，竹田里江，森元隆文，佐藤智美，松山清治：フィンランドにおけるネウボラと精神科医療連携に関する視察報告。札幌保健科学雑誌 6:53-57，2017。

[学会発表](計3件)

Sawada I, Ono M, Miyajima N, Tsukamoto M, Kato N.: Evaluation Study on Triple P Trial for Parents Receiving Psychiatric Outpatient Service in Japan - . The 2016 Helping Families Change Conference. Banff, 2016, 2

澤田いずみ：メンタルクリニックに通院する母親の育児支援ニーズとグループトリプルPが及ぼす変化。第23回日本家族看護学会学術集会。山形。2016, 7

Sawada I, Takeda S, Ikeda N, Kuroda M, Morimoto T, Ukai W, Matsuyama K.: Parenting support needs of mothers visiting a mental clinic for treatment and changes after participating in the Group Positive Parenting Program. The 21st EAFONS (East Asian Forum of Nursing Sch, lars) & 11th INC (International Nursing Conference). Soul, 2018, 1

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：竹田 里江

ローマ字氏名：(TAKEDA, satoe)

所属研究機関名：杏林大学保健学部

職名：教授

研究者番号：10381279

研究分担者氏名：池田 望

ローマ字氏名：(IKEDA nozomu)

所属研究機関名：札幌医科大学保健医療学部作業療法学科

職名：教授

研究者番号：00274944

研究分担者氏名：森元 隆文

ローマ字氏名：(MORIMOTO, takafumi)

所属研究機関名：札幌医科大学保健医療学部作業療法学科

職名：講師

研究者番号：60516730

研究分担者氏名：松山 清治

ローマ字氏名：(MATSUYAMA, kiyozhi)

所属研究機関名：札幌医科大学保健医療学部作業療法学科

職名：教授

研究者番号：40209664

研究分担者氏名：鵜飼 渉

ローマ字氏名：(UKAI, wataru)

所属研究機関名：札幌医科大学医療人育成センター

職名：准教授

研究者番号：40381256

研究分担者氏名：大野 真美 (平成27年度)

ローマ字氏名：(ONO, mami)

所属研究機関名：札幌医科大学保健医療学部看護学科

職名：助教

研究者番号：70635896

研究分担者氏名：佐藤 智美(平成 28 29 年度 9 月まで)
ローマ字氏名：(SATO, Tomomi)
所属研究機関名：札幌医科大学保健医療学部看護学科
職名：助教
研究者番号：30781398

研究分担者氏名：塚本 美奈(平成 30 年度から)
ローマ字氏名：(TSUKAMOTO, mina)
所属研究機関名：札幌医科大学保健医療学部看護学科
職名：講師
研究者番号：30608500

研究分担者氏名：奥田 かおり
ローマ字氏名：(OKUDA, kaori)
所属研究機関名：北海道医療大学看護福祉学部
職名：講師
研究者番号：40632609

(2)研究協力者

研究協力者氏名：伊藤 恵里子
ローマ字氏名：(ITO, eriko)
研究協力者氏名：内田 梓
ローマ字氏名：(UCHIDA, azusa)
研究協力者氏名：高村 美香
ローマ字氏名：(TKAMURA, mika)
研究協力者氏名：黒田 美幸
ローマ字氏名：(KURODA, miyuki)
研究協力者氏名：吉野 淳一
ローマ字氏名：(YOSHINO, junichi)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。